

(第94回) 歌舞伎「吉例顔見世大歌舞伎」

11月12日歌舞伎座「昼の部」

今回の歌舞伎は11月恒例の「吉例顔見世大歌舞伎」である。以前も触れたが、江戸時代は役者の契約が11月から。顔見世はこれから1年間の顔ぶれを披露するという意味合いを持っているとされる。昼の部を観劇した。参加者は28名であった。

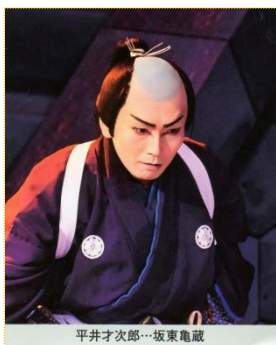
出し物は「研辰の討たれ」「関三奴」「髪結新三」の3演目であった。

「研辰の討たれ」は大正14年木村錦花作の所謂、新歌舞伎である。テーマは敵討ちである。

江戸時代には武家社会では敵討ちは最高の美德とされ、且つ、それを実行する為には厳格なルールがあったとされている。明治6年に復讐禁止令が發布され、公には敵討ちは亡くなったが、実際には各地で敵討ちは散見され、最後の敵討ちは明治13年の「臼井六郎敵討ち事件」とされている。今回の「研辰の討たれ」は大正14年作。当時の武士道、敵討ち批判の風潮を反映されたものとされている。



刀の研ぎ師だった守山辰次(松本幸四郎)は、今は侍の身。慣れぬ社会で立ち回ろうとするが、歯車はかみ合わず、叱責する家老・平井市郎右衛門(大谷友右衛門)を、逆恨みし、だまし討ちにしてしまう。



父を討たれた平井九市郎(坂東彦三郎)才次郎(坂東亀蔵)兄弟は敵討ちを果たすべく辰次を各地に探し回る。逃げる辰次(松本幸四郎)との攻防が見せ所である。必死に逃げ回る辰次(松本幸四郎)が逃げ切ったかに見えたが、最後には九市郎(坂東彦三郎)・才次郎(坂東亀蔵)兄弟が敵討ちを果たし、本懐を遂げる、

本来、悪役であるはずの辰次(松本幸四郎)は何故か親しみを感じさせる役どころを松本幸四郎が好演。実の兄弟が演ずる九市郎(坂東彦三郎)・才次郎(坂東亀蔵)は息の合った演技でコミカルな味わいも感じさせる演目であった。

「関三奴」は中村芝翫、尾上松緑による江戸の日本橋を



背景とした威勢の良い踊り。踊りの演目はどれもいつもリラックスし、理屈抜きで楽しめる。今回も男盛りの中村芝翫・尾上松緑によるリズムカルな足拍子が印象に残る江戸情緒たっぷりの踊りであった。

「髪結新三」は河竹黙阿弥の生世話物の代表作である。テーマは誘拐である。河竹黙阿弥は江戸時代末期から明治にかけて活躍した歌舞伎狂言作者。江戸時代の市井を描写した生世話物を得意とし、本作はその中の傑作と言われている。全編に流れる七五調の名台詞、バックに流れるもの悲しい三味線の調べが、格調の高い演目に仕上げている。歌舞伎評論家の上村似和於氏は今回の公演を、日経新聞で「菊五郎が黙阿弥狂言の粋を見せる。することが悉く壺にはまり、芸の行き着く涯ての自然体といった趣だ。」と絶賛している。

髪結新三（尾上菊五郎）は白子屋の一人娘お熊（中村梅枝）を誘拐し、身代金をせしめようとする。困り果てた白子屋は顔役の弥太五郎源七（市川團藏）に助けを求めるが、新三（尾上菊之助）は威勢良く啖呵を切って弥太五郎源七（市川團藏）を追い返してしまう。そこで登場するのが老獪な家主の長兵衛（市川左團次）。長兵衛（市川左團次）は入れ墨者の新三（尾上菊之助）を住まわせている事を恩に着せ、身代金三十両で会得させ、お熊（中村梅枝）も帰宅させる。挙句の果て、三十両の身



代金の内、過去の悪事をばらすと脅し半分の十五両をせしめ、長兵衛（市川左團次）の策略はまんまと成功したかに見えた。この間の新三（尾上菊之助）と長兵衛（市川左團次）とのやり取りが、家主女房おかく（市村萬治郎）・肴売新吉（市村橘太郎）を交え、黙阿弥狂言の見せ所と言えるのだろう。十五両をせしめた長兵衛（市川左團次）であったが、家に泥棒は入ったとの知らせが入り、慌てふためき家に戻って行く。

最後の場面は遺恨を持つ新三（尾上菊之助）と源七（市川團藏）が深川閻魔堂橋の近くで太刀を交わすところで幕となった。

「髪結新三」も誘拐犯が主役であるが、「研辰の討たれ」と同様、悪党一辺倒ではなく、人間臭い一人の生き様として描かれている。

今回の 3 演目も夫々見所満載で大いに堪能させて頂いた。次回の歌舞伎を今から楽しみにしている。

（織田・文雄記）

以下余白